
雌犬の息子

須江

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雌犬の息子

【Nコード】

N9688M

【作者名】

須江

【あらすじ】

ごめんなさいごめんなさいごめんなさい、僕は愛する君に汚い欲望を注ぐしか能のない最低のゲス野郎なんです・・・なんて言うと思った？どうせ聞いてないくせに。

教師と生徒。ペド表現注意。

（前書き）

少年愛表現あります。 苦手な方は申し訳ありませんがブラウザバツ
ク願います。

でもダウダウにもされたし、と唇を尖らせるユウに、僕は何も言うことができなかった。担任としてならまずシャツの裾を下ろすように言い、ダウニーが何をしたか（ユウはユニークなネーミングセンスの持ち主で、教師の名前の一部を二回繰り返して呼ぶ。例えば隣のクラス担任チャールズ・ダウニーならダウダウ、僕はファーストネームをまるごと、ジョンジョンだ）問い詰める。けどこの忌まわしい性癖に準じれば？言葉はいらない。肋骨もまだ浮く9才児の脇腹にかぶりつく。僕が葛藤を続けている間、子供は残酷だ。待ちきれずに呟く。「ジョンジョンの髪の色は僕のパパと一緒にだね」。華奢で透き通りそうな指が僕の黒い髪の中に埋まる。去年までいた大学院では絶対なかった刺激、ロマンス。目が眩む。駄目だよユウ、大人は卑怯なんだ。耳では廊下の様子を窺いながら、目は君の平べったい腹に釘付けなんだから。

父子家庭のユウは成績も身長も平均並み、少し痩せているのが気になったが大したことじゃない。問題があるとすればやはりその家庭環境。父親は仕事柄家にあまり居着かない。必然ユウは知り合いの家を渡り歩くことが多い。その一人に近所に住み、前年の担任だったダウニーがいることは知っていた。だが彼がこんなことを。年も近いし変り者だが愉快的奴だと信頼していたのに。

僕はと言えばこの趣味のせいで青春を悶々と過ごしたクチ。大学院まで行って学んだのは善人の装い方。それでも周りから信頼される我慢できずこの職を選んだけど、今のところ問題なかった。目の届くところで子供達が元気に走り回っている、彼らと触れ合える。それだけで十分満足だった。

そんな矢先にユウは僕を誘惑する。最近淋しげにしてるから話をしようとか放課後教室に残したのは下心があったわけじゃ断じてない。お父さんは、と聞けば今日から泊まり、帰る場所は叔父さんの家。近いから大丈夫と気丈な口振り。僕の両親も共稼ぎだったから淋しさはよく分かる。

「淋しいよ、叔父さんはぎゅってしてくれない」

「へえ？」

「ダウダウはいつもしてくれるけど」

彼が子供をそんな甘やかすなんて想像できない。おかしくて思わず笑えば、ユウは少し頬を膨らませた。

「何で笑うの」

「いや。先生は膝に乗っけたりする？」

「うん。眠るまでずっと。キスもしてくれる」

そういつて捲り上げられた裾の下にあったのが、陽に焼けない真っ白な肌と浮かぶ赤い跡だったときの衝撃。信じられない。

「ダウダウはいじわるもするけど優しいよ」

黒い髪の下から覗く真っ黒な瞳は、親に何かをねだるような色を浮かべていた。「ジョンジョンも厳しいけど、優しいよね」

一応僕にもプライドがあるし理性もある。けど頭を辿る頼りない指先、かかんない視線。半ズボンの下で焦れて動く足。全てが僕の心を揺さぶった。駄目だと知っていた。同意があっても僕は犯罪者だ。でも、少しだけなら。大体彼は自ら望んでいる。トラウマなんてならないはずだ。

僕はもう頬まで降りてきたユウの手を両手で包み込んだ。そのままずっと触れ続けて欲しかったが、消えてしまいそうな手を掴んだ途

端、それまでになかった恍惚が一気に背中を駆け抜けた。抱きしめたときは痺れた。片手で括れてしまいそうな首筋からは子供らしい砂場の匂いがした。張りのある襟足の皮膚がほんの少し緊張している。柔らかい唇と小さな鼻が肩口に当たる感触。そこから溶けていきそうだった。

身を離せば名残惜しそうな顔をしたので、更に彼のまだ小さな膝の関節に触れるくすぐったそうによじったので、まだ腰に触れたままだった手のひらで引き寄せた。立てた方膝に座らせ、ほんの間に近にある柔らかい頬に唇をつける。ユウは肩をすくめ笑った。「いや」と言いながら拒否の反応は全く見られない。

「どうし、て？」

興奮のあまりもつれた口調で聞けば、ユウはまだ困ったような笑いを続け言った。

「だって」

すぐその目付きに捕らえられたら、一緒に引きずり込まれることはわかってるのに。

「泊めてくれない人にキスさせちゃ駄目だって、昔ママが言ってたから」

それからたつぷり数秒間、僕は家に今ある食材で栄養のある食事を作れるか、必死に考え続けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9688m/>

雌犬の息子

2011年10月9日19時14分発行